



## 日本の夏を彩る花火の美的特徴

日本の花火は、種類が豊富で、材料の配合が絶妙である。安価な輸入品に押されながらも、花火の色・形・迫力が進化している。

一本で20回も色が変わる花火や、炎がユウターンして二つの炎が出会う花火、香りが付いたスイカ花火（2021年製造）、爽快感が特徴のレモンスカッシュという花火もある。

手持ち花火は、ススキの穂のような炎が特徴のススキ花火と、パチパチと飛び散る炎が特徴のsparklersの2種類に大別される。

花火の色を決めるのは、金属の粉で、燃えると金属の元素ごとに特有の色が出る性質を利用している。炎色剤の酸化銅は青色に、硝酸バリウムは緑、炭酸ストロンチウムは深い赤（紅）色、硫黄は青白い色、リチウムは赤、ナトリウムは黄、硝酸カリウム（硝石）は淡い紫色、銅は青緑、カルシウムは橙色、バリウムとホウ素は黄緑、リンは淡い青になる。

これらの炎色剤の内でも、ストロンチウム・銅・ナトリウム・バリウムの4種類の金属の組み合わせで色々な色が作られている。

数分間に数十から数百発を打ち上げるスターメインもあるが、優美で華麗・精巧な手持ち花火には芸術美が見られる。（吉村耕治）

## 源氏物語の色-38「柏木」

光源氏四十八歳の年の一月、正妻女三の宮は男児を出産する。柏木との不義の子、のちの薫である。そして、光源氏の意に反して女三の宮は、若くして出家を遂げてしまう。

その三月、薫の五十日（いか）の祝いが行われた。女三の宮は尼削ぎではなく、額髪だけを切りそろえ、後ろは長い髪を残した姿で、装束は「すぎすぎ見ゆる鈍色ども、黄がちなる今様色など着たまひて」とある。

次々と濃くなって見えるように幾枚かの鈍色を重ねた桂の下に、黄みがかかった今様色の単衣を着ているということであろう。

まだ尼の姿になりきっては見えないその横顔は、美しい子供の様で、優雅に見えたと書かれている。

今様色とは紅花染めの色で所説あるが、今風、現代風つまり流行色の意であろうとされる。鈍色は喪服や、僧、尼の衣服に用いる墨染の色で、尼僧は、鈍色や青鈍の小袿、袈裟などを着用する。

この場面で「墨染というのは、目がくらむような何とも悲しい色ですね」と嘆く光源氏の言葉に女三の宮そして、我が子ならぬ我が子への切ない想いが重なる。

（平山和香子）

## 芸術祭キュレーターと色風景対談-3

表題：国際芸術祭「あいち2022」から学ぶアートとまちの魅力 -生きていくまちを活かすアート、活かされるアート-

現在開催中の、国際芸術祭のテーマ「STILL ALIVE」の起点は、電報で自分の生存を発信し続けた作品です。先が見えない現況でも、未知の世界、多様な価値観や芸術の美しさと出会うことが今を生き抜くためのポジティブなエネルギーに繋がるという構想です。その出会いの場となる芸術祭の見所を、飯田氏からお聞きできるまたとない機会です。会場の一宮、常滑、有松の色風景についても対談します。

◆講師：飯田志保子氏（チーフ・キュレーター）  
ナビゲーター：三木学（文筆家 / 編集者）

◆日時：9月13日（火）19時～20時半

◆申込：まもなく〆切 9月10日（土）

<https://forms.gle/9b3vdu5ASWsxyp4K9>

◆受講料：オンライン（Zoom）

色彩学会員 2,000円・非会員 3,500円

◆詳細：[https://color-science.jp/society/20220913\\_event/](https://color-science.jp/society/20220913_event/)

国際芸術祭：<https://aichitriennale.jp/>

◆主催：くらしの色彩研究会・美しい日本の色彩環境を創る研究会（祖父江由美子）